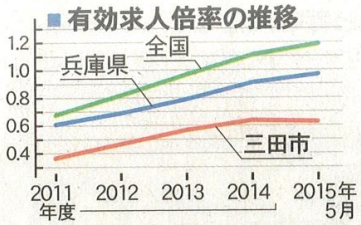
三田の自画像

市長選を前に

❺働く場

■有効求人倍率の推移



三田市は〝ねぐら都市〟なのか―。2010年の国勢調査で、市の就業人口は約5万4千人。このうち約2万8千人が市外に勤務する。実に53%。総人口の4分の1が、毎日のように市境を越えて出勤し、働き、市内に帰ってくる。ニュータウン開発によって30年で人口が3倍となった三田市らしい数字だ。

数字をもう一つ。5月の有効求人倍率、0・63倍。「ハローワーク三田」が管轄する三田市と神戸市北区の一部を含む地域は、仕事を求める人に対し、求人数が足りない。全国の1・19倍、兵庫県の0・97倍と比べ、雇用面だけなら〝大不況〟といえる低さ。地元で働きたくても、働く場が少ないのが現状だ。

◇　◇

「三田がただの〝ねぐら〟にならないように」（市商工観光振興課）と、開発された企業団地「北摂三田テクノパーク」。1970年から開発が始まり、「第二」と合わせ、45社が操業。従業員数は5千人前後に及ぶ。地元雇用の立派な受け皿のように映るが、内実はそうではない。どの企業も採用計画の立案・実行を本社が担う。パーク内に本社を置くのはわずか4社。

「嘱託やパート採用ばかりで、正社員雇用は極めて少ない」。川嶋昭徳・ハローワーク三田所長が明かす。

一方で、三田がほぼ自動的に〝ねぐら都市〟を脱する時期が、すぐそこに迫っている。

国の予測によると、10年に約1万9千人だった65歳以上の高齢者は、20年に1・5倍の約2万9千人、30年にほぼ倍増の約3万7千人になる。県内トップの増加率で、高齢者激増時代に突入する。ニュータウンに入居し、大阪や神戸で働く人たちが定年を迎える。「昼間の生活」の舞台を地元に移す。

◇　◇

昼下がりのハローワーク三田。青年や主婦に混じって、高齢者男性の姿が目立つ。求職者の23%が60歳以上。裏腹に、「若い労働力がほしい」という企業が多いという。

市シルバー人材センターには市内の約千人が登録し、除草や里山管理などに励む。子どもの一時預かりに精を出す寺戸博子さん（73）＝あかしあ台3＝は、報酬はわずかだが「手軽に社会貢献できる働き場。今では生きがい」と充実した表情を見せる。

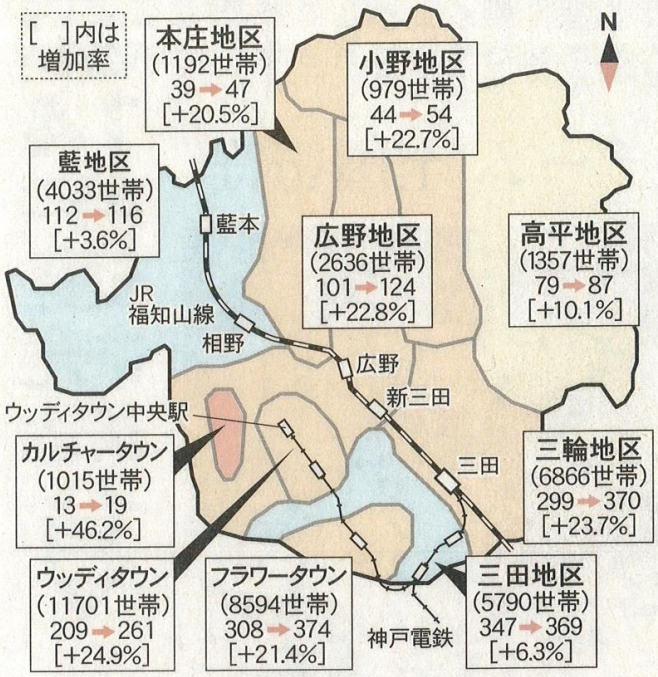
「懸命に働いた人ほど定年後に閉じこもりがちになる。自分の役割を確認する『働く場』が必要」と、高齢者心理を研究する田渕恵・日本学術振興会特別研究員は指摘する。

高齢者の1人世帯が急増している。市内10地区中7地区が、13年までの4年間で20%超の増加率を記録した。地域と関わらないまま人生を終えてしまう「孤独と死（都市）」にならない選択を、考える時機が来た。

（村上晃宏）

＝おわり＝

■1人暮らし高齢者数の推移（2010→2013年度）



子どもの一時預かりに精を出す高齢者。充実した表情で働く＝三田市あかしあ台5